

招待席

永井 荷風

ながい かふう 1879.12.3 - 1959.4.30 東京小石川金富町に生まれる。文化勲章。若き日に渡米さらに渡仏し巴里に心酔するが父の厳命により帰国し、慶大教授となり「三田文学」を主宰した。私生活にも作風にも波瀾のある生涯であったが、基本に日本の軽薄な近代化に対する失望と蔑視があり、太平洋戦争後にまでも反時代的耽美と放蕩の世界に徹した。掲載作は、大戦中の昭和十七年(1942)十二月の作を、敗戦直後の「新生」昭和二十一年(1946)一月号に初出の短篇。戦前大家のいちはやい復活を印象づけた。

勲章

寄席、芝居。何に限らず興行物の楽屋には舞台へ出る藝人や、舞台の裏で働いてゐる人達を目あてにしてそれよりも亦更に果敢(はかな)い渡世をしてゐるものが大勢出入をしてゐる。

わたくしが日頃行き馴れた浅草公園六区の曲角に立つてゐた彼(か)のオペラ館の楽屋で、名も知らなければ、何処から来るともわからない井飯屋の爺さんが、その達者であつた時の最後の面影を写真にうつしてやつた事があつた。

爺さんはその時、写真なんて亾ものは一度もとつて見たことがねえんだヨと、大層よろこんで、日頃の無愛想には似ず、幾度となく有りがたうを繰返したのであつたが、それが其人の一生の恐らく最終の感激であつた。写真の焼付ができ上つた時には、爺さんは人知れず何処かで死んでゐたらしかつた。楽屋の人達はその事すら、わたくしに質問されて、初て気がついたらしく思はれたくらいであつた。

その日わたくしはどういふ訳で、わざわざカメラを提げて公園のレビュー小屋なんぞへ出掛けたのか。それはその頃三の輪(みのわ)辺の或寺に残つてゐた墓碕(ぼけつ)の中で、寺が引払ひにならない中(うち)に、是非とも撮影して置きたいと思つてゐたものがあつた為で。わたくしは其仕事をすましてからの帰途、ぶらぶら公園を通過ぎて、ふと池の縁(へり)に立つてゐるオペラ館の楽

屋口へ這入つて見たのだ。

楽屋口へ這入ると「今日終演後ヴアラエテ—第二景第三景練習にかゝります。」だの、何だのと、さまざまな掲示の貼出している板壁に沿ひ、すぐに塵芥(ごみ)だらけな危ツかしい階段が突立つてゐる。それを上ると、狭い短い廊下の真中に、寒中でも破れた扉の開け放しになつた踊子の大部屋。廊下の片隅にこの一座の中では一番名の高い藝人の部屋があり、他の片隅には流行唄(はやりうた)をうたふ声楽家の部屋。また一階上へあがると、男の藝人が大勢雑居してゐる。こゝではこれを青年部と称へてゐて、絶えずどたばた撲り合の喧嘩がある。然しわたくしがこの楽屋をおとづれる時、入つて休むところは座頭(ざがしら)の部屋でもなく、声楽家の控所でもなく、わかい踊子のごろごろ寝そべつてゐる大部屋に限られてゐる。

踊子の部屋へは警察署の訓示があつて、外部の男はいかなる用件があつても、出入はできない事になつてゐる。然るにわたくしばかりはいつでも断りなく、づかづか入り込むのであるが、楽屋中誰一人これを咎めるものも、怪しむものもない。これには何か訳がありさうな筈である。然しわたくしは茲(こゝ)に仔細らしく、わたくしばかりが唯一人、木戸御免の特権を得てゐる事について、この劇場とわたくしとの関係やら何やらを自慢らしく述立てる必要はないだらう。わたくしがそもそも最初にこの劇場の楽屋へ入り込んだ時、わたくしの年齢は既に耳順に達してゐた。それだから、半裸体の女が幾人となくごろごろ寝転がつてゐる部屋へ、無断で闖入しても、風紀を紊乱(びんらん)することの出来るやうな体力は既に持合してゐないものと、見做(みな)されてゐたと言つたなら、これが何よりも一番簡単で要領を得た弁疏になるのであらう。イヤ文壇だの劇壇だのに於ける、わたくしが過去半生の閱歴が、何だの彼(か)だのと、そんな事から自然に生ずる信用が、どうだの、かうだのと、そんな気障(きざ)な文句は言ひたくもなければ、書きたくもない。それよりはまだこの別天地を見たことのない好事家(かうずか)のために、わたくしは何よりもまづオペラ館の踊子部屋といふのは一体どんな処だか、試にこれを記述してみやう。

部屋のひろさは鳥渡(ちよつと)見たところでは、正しく数字には出しにくい。が、踊子の人数の多いときには、二十人を越すことがあつても、目白押しにそれだけの人数は入れられると云ふことで、大体は推察してもらひたい。部屋は普通家屋の内部に見られるやうな方形をなしたのではなく、三角なりにゆがんでゐて、扉のとれた開け放しの入口から、真直に幅三尺ばかり、長さ一二間ほどが板敷。その他は一面に畳が敷詰めてあるが、この畳の破れずにゐたのを見たことは、わたくしがこの楽屋に出入をして以来、四五年間、わづかかに一二度であらう。

踊子はいつも大抵十四五人、破畳に敷き載せた破れた座布団の上に、裸体同

様のレビューの衣裳やら、楽屋着やら、湯上りの浴衣やら、思ひ思ひのものに、わづか腰のあたりだけをかいたばかり。誰が来やうが一向平気で、横になつたり、仰向きになつたり、胡坐(あぐら)をかいたりしてゐる。四五人寄添つて額をつき合せながら、骨牌(かるた)を切つてゐるものもあれば、乳呑児を膝の上にして、鏡に向つて化粧をしてゐるものもある。一人離れて余念なく附睫毛(つけまつげ)をこしらへたり、毛糸の編物をしてゐるものもあれば、講談雑誌によみ耽つてゐるものもある。

畳を敷かない板の間には、歩く余地さへないばかり、舞台ではく銀色のハイヒールやサンダルの、それも紐が切れたり底や踵の破れたりしたものが脱捨てられ、楽屋用の草履や上靴に交つて外ではくフェルト草履や、下駄足駄までが一つになつて転がつてゐる時がある。紙屑、南京豆、甘栗の殻に、果物の皮や竹の皮、巻煙草の吸殻は、その日当番の踊子の一人や二人が絶えず掃いても掃いても尽きない様子で、何も彼も一所くたに踏みにじられたまゝに散らばつてゐるのだ。

見渡すと、女の人数だけずらりと並んだ鏡台と鏡台との間からはわづかに漆喰(しつくひ)の剥落ちた壁が現れてゐて其面には後から後からと、重なつて書き添へられたいたづら書のさまざま。男女映画俳優の写真が横縦勝手放題にピンで留めてある。巻煙草の空箱をこれもピンで留めて、穂先のきれた化粧筆が二三本さしてある。レビューの衣裳が何枚と知れず、重つた上にもまた重つたまゝぶらさげられて、夏の盛りにも狭い窓の光線を遮つてゐる。窓の戸のあいてゐる時や、またその硝子板の割れ落ちてゐる時には、ぶら下つた衣裳のあひだから池の縁の木の梢と、池の向うの興行場の屋根とが見える……。

オペラ館の踊子部屋と云ふのは大体まづこんな有様で。即ち散らかし放題散らかしても、もう此れ以上はいかに散らかしたくとも散らかすことはできないと思はれる極度の状態である。それは古ぎれ屋か洗張(あらひばり)屋の店の引越騒ぎとでも言はゞ言はれべき、何とも彼とも譬へやうのない混雑である。然しこの混雑の状態は、最初一目に見渡す時、何より先に、女の着る衣裳の色彩の乱れと、寝たり起きたりしてゐる女の顔よりも、腕や腿の逞しい筋肉が目につくので、貧院や細民窟の不潔や混雑とは全くちがつた印象を与へる。之を形容したら、まづ花屋の土間に、むしり捨てた花びらの屑や、草の葉の枯れくさつたのが、滅茶々に踏みにじられたまゝ、掃かれもせずに捨てられてあるやうな趣があるとでも言はれるであらう。

安香水と油と人肌と塵埃との混じ合つた重い匂が、人の呼吸を圧する。階下(した)の方から、音色の悪い楽隊の響や、人の声が遠く聞えて来る。木造の階段を下駄ばきで上り下りする跽音(あしおと)の絶間がない。これ等の物音は窓外の公園一帯の雑音と一つになつて、部屋の低い天井に反響する甲高(かんだ

か)な女の話声、笑声、口ぐせになつた練習の歌声などのさうざうしさを、馴れゝばさほどにも思はせない程度に和げてゐる。

わたくしは踊子部屋の光景　　その暗惨とその乱雑とその騒しさの中には、場末の色町の近くなどで、時々感じ得るやうな緩かな淡い哀愁の情味を、こゝにも亦遺憾なく掬(きく)することができるやうな気がするのである。そしてこの裏さびしくも又懐しい情趣をして、尚一層濃厚ならしむるものは、こゝに生活する人達を目あてに、いろいろな物を売りに来る商人の疲れた容貌と、やつれた風采(みなり)とであらう。

その日、いつものやうに、のそりのそり二階へ上つて行つた時、わたくしは朝鮮人らしい痘痕(あばた)の目につく若い洋服の男が、化粧用の品物を詰込んだ革包の中を、そろそろ片づけ初めてゐるのを見た。そして此男が女達から代金を受取つて立ちかけるところへ、今度は入れちがひに裏長屋のかみさんらしい風体の、年は四十がらみの婆さんがやつて来て、風呂敷の中から、男女共用のワイシャツに、タオル、ハンカチのたくひをひろげ初めた。何れも夏向の品物ばかりであることは、窓から見える公園の木の芽も若葉になりかけ、時候は日ましに暑くなつてゐた事を知らせる。

「よく御覧。みんな純綿(じゆんめん)だよ。公定だつたら税金のつく品物だから。」

純綿の一声に、寝てゐる踊子も起直つて、一斉に品物のまはりに寄集る騒ぎ。廊下を歩み過ぎる青年部の藝人の中には、前幕の化粧を洗ひおとしたばかり。半身裸体のまゝの者まで入つて来て、折重つた女の子の間に割込み、やすいの、高いのと、わいわい言つてゐる最中である。赤ら顔の身体の大いい爺さんが一人、よごれきつた岡持を重さうに、よちよち梯子段を上つて来た。

するとハンカチの地合を窓のあかりに透して見てゐた踊子の一人が爺さんの姿を見るや否や、

「おぢさん、おそいねえ。あたい、ペコペコだよ。」と叱りつけるやうな鋭い調子で言つたが、爺さんは別に返事もせず、矢張退儀さうな、のろまな手付で岡持の蓋をあげ、

「お前のは何だつけ。蓮と蒟蒻(こんにやく)だ。今日はもうおこうこは無えんだよ。」と井を一つ取出して渡した。

年は既に五十を越して、もう六十代になつてゐるかも知れない。盲目縞(めくらじま)の股引(ももひき)をはき、ぢゞむさいメリヤスのシャツの上に背中十文字になつた腹掛をしてゐるのが、窮屈さうに見えるくらい、いかにも頑丈な身体つきである。額と目尻に深い皺が刻み込まれた円顔には一杯油汗をかいてゐながら、禿頭へ鉢巻をした古手拭を取つて拭かうともせず、人の好さゝうな細い目を絶えずぱちくりさせてゐる。

わたくしが写真をとつて大喜びに喜ばせてやつた爺さんといふのは、井を持つて来た此の出前持なのである。

ぢいさんは毎日時刻を計つて楽屋の人達の注文をきゝに来た後、それから又時刻を見はからつて、井と惣菜や香の物を盛つた小皿に割箸を添へ、つひぞ洗つた事も磨いた事もないらしい、手のとれ掛つた岡持に入れて持運んで来るのである。年中めつたに休んだ事はないさうだが、どこに家があるか、女房子供があるのか無いのか、そんな事は楽屋中誰一人知つてゐるものはない。「鮫やおぢさん。」と踊子達は呼んでゐるが、井飯をつくる仕出屋(しだしや)で鮫屋などといふ家は、六区の興行町にも、公園外の入谷町や千束町の裏路地にもないさうだ。一体このオペラ館のみならず、この土地の興行場へ出入をする食物屋(たべものや)には、その種類によつてそれぞれ顔のきいた親分のやうなものがあつて、営業権を占有してゐるといふ事なので、見たところ、この爺さんにはまだそんな権利がありさうにも思はれない。とすると、この年になつても、どこぞの親分に使はれてゐる其日(そのひ)ぐらしの出前持に過ぎないのであらう。惣菜付の井一つの価は楽屋の様子から考へて二十銭より以上の筈はない。其の幾割かを貰つて、爺さんは老後の余命をつないでゐるのであらう。

鮫屋の爺さんは初めに注文された井を二階の踊子と三階の青年部へ、一ツ一ツ配つて歩く中(うち)、おくれて後から注文される物を又しても岡持へ入れよちよちと退儀らしい足取りで持運んで来る。その時分には初夏の長い日もそろそろたそがれかけて、興行町の燈影がそこら中一帯に輝き初める頃になるのである。

二階の部屋の踊子は一しきり揃つて一人残らず舞台へ出て行き、踊つたり跳ねたり歌つたり。そしてまた元のやうに鏡台の前の破畳の上に、つかれきつた身体を投出したまゝ、此の次は夜の部になる其日最終の舞台を待つのである。この間いつも二三時間ばかり。わたくしは踊子と共に舞台裏へ降りて、女達が揃つて足を蹴上げる藝当を、背景の間から窺(のぞ)いて見ることもある。休んでゐる藝人達と楽屋外の裏通へ出て、其辺に並んでゐる射的屋の店先に立ち、景物の博多人形を射落して見たり。やがてそれにも飽きれば再び二階の踊子部屋へ立戻るのである。鮫屋の爺さんはこの間に岡持の持運びも二三度に及んだ後らしく、今は空の井や小皿をも片づけ終り、今日一日の仕事もやつとしまつたといふ風で、耳朵(みゝたぶ)にはさんだ巻煙草の吸いさしを取つて火をつけながら、見れば兵卒の衣裳をつけた青年部の役者と頻(しきり)に話をしてみた。

「さうか。ぢや、おぢさんも戦争に行つたことがあるんだね。何処へ行つたんだ。」

「今話したぢやねえか。日魯の大戦争よ。満洲ぢやねえか。」と言つて、爺さんは禿頭から滑り落ちさうになる鉢巻の手拭を締直したが、「えゝと。何年

前だつたらう。おれももう意久地がねえや。」

急に何やら思出したやうに溜息をつき、例の如く細い目をぱちくりさせながら、ぞつと兵卒の衣裳に鈍い視線を注いでみた。

「おぢさん、いくつになるんだ。」

「うむ。あれアたしか。明治三十七年………て云ふとむかしも昔、大むかしだ。」

一体かういふ人達には平素静に過去を思返して見るやうな機会も、また習慣もないのが当前(あたりまへ)なので、鮫屋の爺さんは人にきかれても即座には年数を数へ戻すことができないらしい。煙草を一吹して、

「あの時分にやおれも元気だつたぜ。」

掌で顔中の油汗を撫でたなり黙り込んでしまつた。兵卒に扮した役者はその側に寝ころんである踊子の方へ寄りかゝりながら、

「おぢさん、戦争へ行つて、勲章、貰はなかつたのか。」

「貰つたとも。貰はねえでどうなるものか。嘘ぢやねえ。見せてやろうか。」

得意な力づよい調子が胸の底から押出された。

「持つて来て見せてやろう。親方の家へ置いてある………。」

「おぢさん。」と兵卒に寄掛かれた踊子は重さうに其男を押し退け、「お見せよ。ねえ。おぢさん。新ちやんの衣裳を着て、勲章下げて御覧よ。」

「ふゝふゝ。おもしれエ」

爺さんは妙な声を出して笑つたが、急に立上り、空井を片づけた岡持の取手をつかんで、そのまゝ出て行つた。

わたくしは踊子の中の誰彼にせがまれて、いつものやうに写真を取りはじめ。窓の外はもう夜になつてゐたが、並んだ鏡台の前毎に、一ツづゝかなり明るい電燈がついてゐるので写真を取るには都合がよい。

爺さんは果して岡持も持たず手ぶらでやつて来た。さつき胡座(あくら)をかいてゐた処へどつさり腰をおとすが否や、腹掛の中から汚れた古ぎれに包んだものを掴み出したのは、勲章にちがひない。然し話の相手になつてゐた役者は舞台の方へ降りて行つた後で、廊下と階段には同じ兵卒や士官に扮した者達が上つて来たり下りて行つたりしてゐる最中。舞台では何か軍事劇の幕があいてゐるところと見えて砲声と共に楽屋の裏まで煙硝の匂が漂ひ、軍歌の声も聞えてくるのである。

踊子達は爺さんが取り出して見せる勲八等の瑞宝章と従軍記章とを物珍らし気に寄つてたかつて見てゐたが、する中(うち)、衣裳の軍服へ勲章を縫ひつけてやるから、一枚写真を取つておもらひと言出すものがあつた。鮫屋の親爺が遂に腹掛をぬぎ、衣裳の軍服に軍帽をかぶり、小道具の銃剣まで下げて、カメラの前に立つことになつたのは、二十人近い踊子が一度に揃つて、わいわい囃

立てる其場の興味に浮(うか)された為であらう。

爺さんは玉の汗をばたばた滴(たら)しながら、今まで一度も口をきいたことのないわたくしに、幾度となく礼を言つた。

わたくしは家へかへつて其夜すぐフィルムを現像して見た。露出は思つたよりもよくできてみたが、ふと気がついて見れば、勲章のつけどころが規則通りではなく、軍服の胸の右側になつてみた。これは其時脱捨てゝあつた衣裳へ、踊子が勝手次第に勲章を縫付けた為か。或は爺さんも年をとつて思ひちがひをした為でもあらう。

わたくしは仕方がないから引伸して焼付をする時、フィルムの裏表を逆にして、見たところだけをそれらしく紛らせ、十日ほど過ぎてから楽屋へ持つて行つた。

「鮫屋は来ないなア。今日は。」とわたくしは暫く待つてみた後、踊子の一人にきいて見た。

「あれツきり来ないのよ。」

「ぢや、井は誰が持つてくるんだ。困るだらう。」

「外の家のものを食べるから困らないわ。」

話はそれきりである。

また一週間ほどたつて遊びに行つて見たが、其時には楽屋中もう誰一人、鮫屋の事をきいても返事をするものもない。そんな親爺がこの楽屋へ井飯なんぞ持つて来たことがあつたのかと、思返して見やうとする者すら、一人もないやうな有様であつた。

わたくしは爺さんがいつも酔つたやうな赤ら顔に油汗をかき、梯子段の上り下りも退儀さうであつた様子から、脳溢血か何かで倒れたものと、勝手な考方をした。然し身寄のものでもあるなら、折角うつした写真だけは届けてやりたいたいと思つたが、無論そんな手蔓のあらう筈もなかつた。

写真は今でも捜したなら、わたくしが浅草風俗資料と紙札をつけて、興行物のプログラムや流行唄や踊子の姿など、さまざまな写真や紙片を投込んで置く箱の中にしまはれてゐるであらう。